特集 海上の森はいま

「海上の森を語る」

海上の森で活躍されるお２人に海上の森への想いをインタビューしました。

木村光伸

プロフィール
海上の森の会会長/名古屋学院大学人間健康学部教授

海上の森との出会い
万博開催をめぐる議論の高揚が身近な自然（海上の森）に私を誘ってくれました。

マリ クリスティーヌ

プロフィール
あいち海上の森ｾﾝﾀｰ名誉ｾﾝﾀｰ長/異文化ｺﾐｭﾆｹｰﾀｰ/国連ﾊﾋﾞﾀｯﾄ親善大使/2005 年日本国際博覧会広報ﾌﾟﾛﾃﾞｭｰｻｰ

海上の森との出会い
英字新聞で愛知万博の開催地をめぐり市民が立ち上がった記事で Kaisho Forest を目にしました。

Q１　海上の森の魅力は？

マリ：　海上の森が里山であるということです。と言っても、禿山になってしまった森を再生したという経緯を持つので、純粋な里山とは言えないかもしれないけど、今は里山の心と魂を持った場所なのです。人が生きることの原点は、土や自然と近いところで生活するということ。「桃太郎」のおじいさんは燃料を得るために山で芝刈りをします。人々の生活に必要なものは手の届く場所にありました。しかし、現代の私たちはそういう体験をすることが難しいです。海上の森は私たちの生活に関わるものが自分たちのところへ届く経緯を見るための舞台です。里の教室では、みんなで田植えをして、お世話して、秋に収穫して、餅をついて分け合って食べる。それは一人では絶対出来なくて、大勢の人たちの関わりがあるのです。イノシシの食害に遭ったならば、防御の柵をつくる。そこで技術が生まれ、そして技術が発展し今の産業に繋がるのです。海上の森は原点があってこそ、今があるということを分からせてくれるとても大事な場所です。

木村：およそ 30 年間にわたって生態研究者として関わってきたアマゾン熱帯林ではいつも自然そのものの仕組みの偉大さに圧倒されてきましたが、海上の森を歩くとその自然のやさしさに気づくことが出来ます。それは人間の暮らしとの調和を実感することだといってもよいかもしれません。歴史的に築かれた人間ー自然系としての里山に、私たちの精神活動の揺り籠を感じるのかもしれませんね。確かに海上の里と森の現状は長年の放置によって部分的に荒廃していますが、一方で生物多様性が人間活動とも密接に関係した事柄なのだということを、私たちに教えてくれています。

Q２　これからの海上の森は？

木村：里山再生スタートのポイントは里のイメージをみんなでつくることに尽きます。同時に里山で受け継がれてきた生活の技術や農林業にまつわる共同体の約束事などを再確認し、その活動主体を県民の中に見出していく努力を継続していくことが必要です。そのような試みはすでに海上の森の会の活動で始まっていますし、ムーアカデミーもまた大切な拠点となることでしょう。自然に対して人智をひとつにして向きあうことこそが、自然の叡智を最大限に活かす道なのだと思います。万博理念の継承っていうのはそういうことなのでしょうね。

マリ：一番大きな期待は、ジェネレーションをつなぐ場です。同じ場所に昔を懐かしんで来る人と新鮮な気持ちで来る若い人たちが集まることで世代格差が減ると思うのです。大人が知識を提供する、それを知らない子どもたちが体験することで共通認識が生まれます。その数を多く持つほど、人はつながっていきますよね。そういう場所としての未来であって欲しいなと思います。やはり土をいじるとか、自然の中にいることが環境を大事にしようという意識をもたらしてくれるので大事だと思います。そう、五右衛門風呂作って欲しいですね。どろんこになって畑仕事した後に薪で炊いたお風呂に入れたら素敵じゃないですか。